



小説 竹内けん  
挿絵 水上凜香

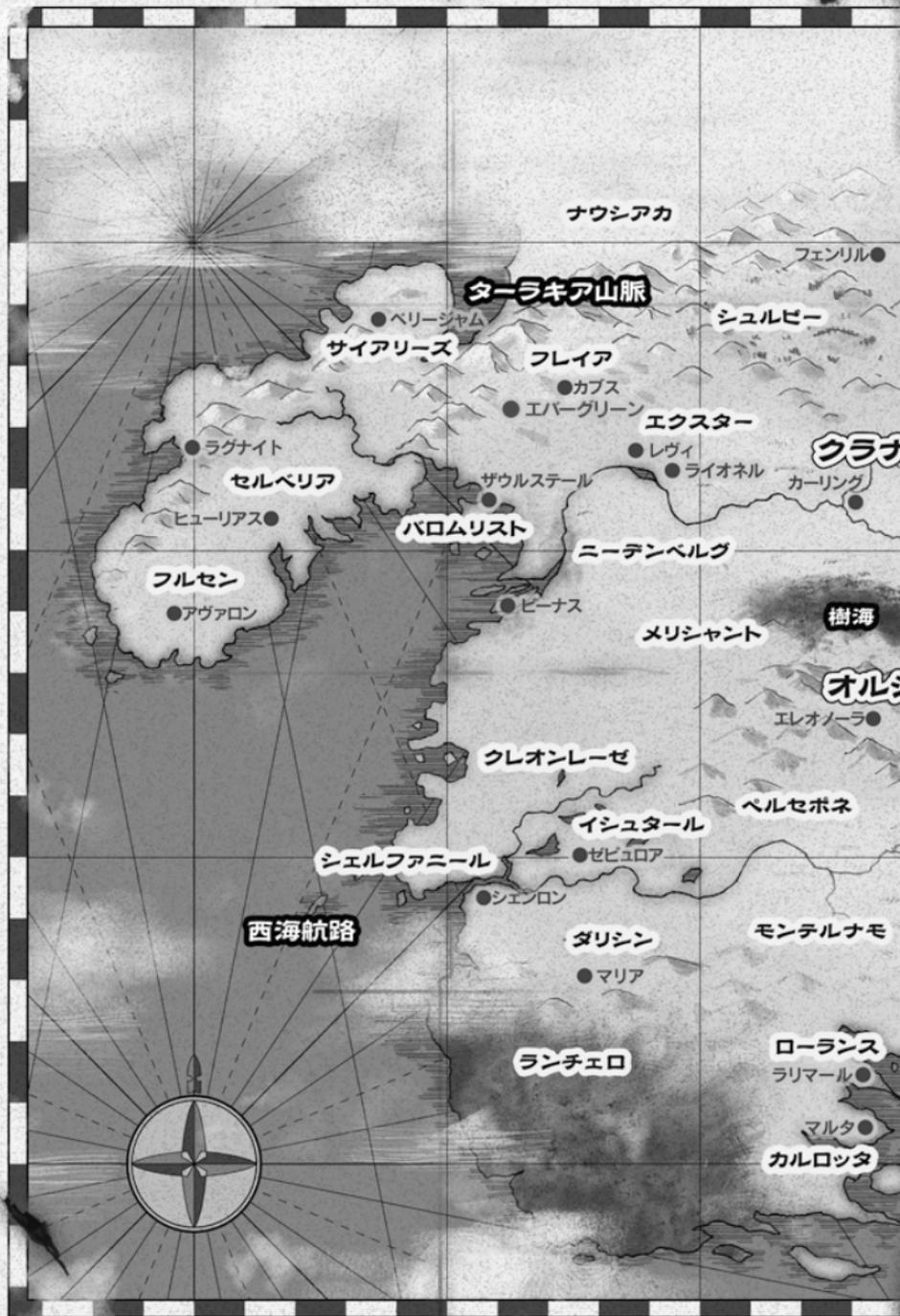
# ハレム レボリューション

*Harem  
Revolution*

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

タラキア山脈

フェンリル

シュルビー

サイアリーズ

フレシア

ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

エクスター

クラナ

ヒューリアス

バロムリスト

レヴィ

ライオネル

カーリング

フルセン

アヴァロン

ニューテンベルグ

ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

シエルファニール

イシュタール

ゼビュロア

シェンロン

西海航路

モンテルナモ

タリシン

マリア

ランチェロ

ローランス

ラリマール

マルタ

カルロッタ





## 登場人物紹介

Characters

### プラザ

オレアンダー王国の名門貴族  
エレメンツ家の娘。プライド  
の高い女騎士。



### ベルンハルト

滅びた祖国を離れ、流浪の  
旅を続けていた元騎士。



## ロータス

オレアンダー王国の名門貴族リシュ  
リュウ家の娘。美しく上品なお嬢様。



## スズ

山で摘んだ花を街で売る、質素  
な生活を送っている健気な娘。

第一章	花の咲く国
第二章	悪党の生きる道
第三章	傾国の美女
第四章	毒池の中の花
第五章	愚兄愚弟
第六章	隻眼の梟雄



### 第三章 傾国の美女

「リシユリユーが謀叛を起こした。ただちに討伐せよ」

オレアンダー王国国王ウオーダンの名で布告があった。

特にベルンハルトが何か離間工作をした、というわけではないのだが、国王とリシユリユー卿の關係は急速に悪化したらしい。

オレアンダー王国の中では例外的に住みやすいと評判のリシユリユー卿の領国であるが、それは国王の命じる無意味な労役を巧みに逃れてきたゆえである。主従の關係はかなり険悪なものとなっていた。そして、それ以上にみなが邪推したことがある。

それを端的に言葉にしたのは、王弟メビウスだ。

「あの馬鹿兄め、ついにロータスを手に入れるために実力行使に出たか。見苦しい」

美姫ロータスがなかなか自分のものにならないことに業を煮やした国王が、なりふり構わずに兵を動かした、とみな考えてしまったのは、日頃の行いゆえであろう。

そこでベルンハルトは進言した。

「女を奪うための戦などに、閣下がわざわざ出陣なさることはありませんでしょう。ここはブラザ様を陣代として遣わされてはいかがですか？」

独自の美意識に生きるメビウスは、元々泥臭い戦場などに足を運びたくはなかったのに、この意見をあっさり取り上げた。

このことが、兄との対立をより先鋭化させるなどという意識はないようである。

(つくづくジュースに似た野郎だな。それだけに御しやすい)

「さんげん讒言とか甘言というものは、主君が欲していることを囁いてこそ効果を持つものである。

ドス黒い感情を隠すためにもベルンハルトは深々と頭を下げた。

こうして、国王ヴォーダン親征による、有力豪族リシユルー討伐戦が始まった。

「あの程度の陣をなぜ攻め崩せぬ。敵はせいぜい五百騎前後であろう。我が軍は三千騎だ。正面から押し潰せ！」

国王ヴォーダンは猛将と言えば聞こえはいいが、兵士たちの命を軽視しているとしか思えない突撃を命じる。しかしそんなものに従う諸侯は絶無である。

何せ、国王よりも人望があると言われた名臣を相手取った戦いだ。

まして、謀叛の容疑が難癖としか思えぬレベルであり、美姫ロータスを欲した国王ヴォーダンの邪恋などと言われているのだから、士気の上がるはずがない。

もつとも身近な親族である王弟ですら、代理を出陣させることでお茶を濁しているくらいだ。いずれの諸侯も及び腰であった。

(リシユルー侯爵ね。会ったことはないが、さすがは国一番の名将と言われるだけはあ

る。なかなか巧妙な守備だ。討伐軍の攻撃が稚拙すぎるといふこともあるが、それ以上に兵士の士気が高い。領民が一丸となって領主を守ろうとしている」

兵の数は少なくとも、やる気のある連中が険阻けんそに籠もつたら厄介である。

(もし、この危機を凌ぎきれたら、リシュリューはこの国の王になるな)

この親征に失敗したら、ただでさえ低かったヴォーダンの権威は地に落ちる。逆に高かつたりリシュリューの人氣は沸騰するだろう。

そうなつたら、もはや勢いは止められない。

(つまり、西方半島のエルフィンが、この花の国にも誕生するというわけだな)

それはこのオレアンダーという国にとってはいいことなのかもしれないが、ベルンハルトとしては面白くない事態である。

(力攻めがダメなら、搦め手からつてのが、常道だろうに……。今のこの国にはその程度の策士もいないか?)

敵の活躍をあつぱれという気分です、他人事のように観戦していたベルンハルトが機を窺つていたとき、思わぬ変化が起きた。

「ええい！ お前たち、それでも誇りあるオレアンダーの騎士か！」

なんとベルンハルトの直属の上司であるプラザがブチ切れたのだ。

(おいおい)

牝虎と化したプラザの咆哮を聞いて、ベルンハルトは目を丸くする。

プラザは、今まで一揆軍の鎮圧にこそ功績はあるが、いわゆる戦争を指揮するのは、今回が初めてであるらしい。

武門の名家に生まれ、男子でなかった己を呪いながら、騎士たらんと欲するプラザは、立派な騎士になりたい、という願望の強い女だ。それゆえに十倍する兵を有しながら停滞する現状に我慢ならなかったらしい。

「戦陣にあつて虚しく時を費やすなど、武名が泣く。オレアンダー王国の社稷しゃしやくの臣は、リシユリユ家ではなく、このエレメンツ家だということを内外に見せつけよ！」

リシユリユ家とエレメンツ家は、オレアンダー王国にあつて二大名家と言つていい貴族たちだ。

他国から来た者にはなかなか伺い知れない因縁があるのだろう。

「先陣となつて討ち死にすることこそ誉れほまであろう！ 者ども命を惜しまず働けっ！」

プラザの主張は正論だが、人間命は惜しいものだ。

（さすがはお嬢様育ち。王家に忠義を尽くす騎士としては立派だが、視野が狭い。兵士たちの心はわかつていないな）

死ぬとわかつているところに特攻するような、クソ度胸のあるやつがそうそういるはずがない。まして、現在のオレアンダー王国にどれほどの戦後補償能力があるか、怪しいも

のだ。

戦功を上げたとしても、恩賞は出るのか、負傷したときの手当で、死んだときの遺族への補償はどうなっているのか。

やる気のない兵士たちと、激昂する上司の間で板挟みとなり、哀れな中間管理職と化してしまった騎士たちは、軍議ではひたすら顔を俯かせている。

プラザに罵倒されている幹部たちの縫るような視線が、自分に集まっていることにベルンハルトは気付いた。

(俺になんとかしてくれってことか)

領内改革を積極的に行ったベルンハルトは、プラザの腹心である。少なくとも、みなそう認識しているようだ。

最近では、愛人だ、情夫だ、恋人だ、という噂も流れているらしい。

プラザに諫言かんげんできるのは、ベルンハルトしかいないと思われているようだ。

(仕方ないか。ここで兵士たちを無駄にしたのでは、来たるべき決戦に支障が出る)

ベルンハルトの思惑としては、この戦いののちに、王弟殿には、国王と闘ってもらわねばならない。

そのときの中核となるのがこの軍隊である。

ほどよく戦争経験を積んでもらいたいところだが、死傷者が山のように出たのでは、本

末転倒というものだ。

「閣下、お人払いをお願いできますか？」

ベルンハルトの顔を見たプラザは、一瞬、引き攣った顔をしたが、しぶしぶ頷く。  
「ぐっ、いいだろう」

プラザが許可したこともあつて、参集していた中隊長たちは席を立つ。  
陣屋に残ったのは、ベルンハルトとプラザの二人だ。

「これでよからう。何か秘策があるのか？」

「いや、そんなことよりもまず、少し頭を冷やしましょうか？」

そう嘯いたベルンハルトは、両手を伸ばし、軍服の上から乳房を鷲掴みにした。

「き、貴様、まさかこんなところでまで……はにゃん！ な、何を考えているか！ ここは戦場だぞっ!!」

激昂するプラザを、ベルンハルトは宥める。

「あなたとロータス姫の間に、どのような因縁が存在するかわかりませんが、熱くなりすぎです」

「侮るな！ わたしは私怨でこのようなことを言っているのではない。確かにこのたびの国王陛下のやりようは理が通らぬ。しかし、それゆえに失敗は許されぬのだ。もし、このたびの討伐に失敗すれば、オレアンダー王国の鼎の軽重を問われる」

国家の崩壊に繋がりがかねない、という危機意識を持っているのはさすがだが、その稚拙さが、彼女の限界であろう。

「大丈夫。これが終わったら、俺がいいようにしてあげますから」

「ぐっ、そんな根拠のない言葉を信じろというのか!？」

激昂するプラザの両の乳首を、ベルンハルトは軍服越しにきゅつと引っ張り上げてやった。

「はう~~~~♪」

頓狂な嬌声を張り上げて、腰が砕けそうになっているプラザの耳元で、ベルンハルトは囁く。

「俺があなたの信頼を裏切ったことがありますか？」

「……ない。だから、こうしてわたしの身体を任せている」

赤面しながらも、しぶしぶ頷くプラザに、ベルンハルトは命じる。

「なら俺への信頼の証として、パンツを脱いでください」

「こ、ここでか？」

一応、陣屋には人払いをしてあるとはいえ、その周りには見張りの兵士などがある。

ためらうプラザに、ベルンハルトは懇願した。

「最近、ずっと戦場だったでしょ。プラザ様のオマ○コに入れさせてもらえないから、俺

のおちんちんが爆発しそうなんですよ」

「仕方ないやつだ。確かにお前のちんぽでは、一週間も我慢したら大変だったろうな」  
女としての自尊心をくすぐられたのだろう。プラザはしぶしぶを装いながら、いそいそと赤いタイトズボンと、その下の明らかに男に見せることを意識しているお洒落なショーツを脱ぐ。

「ほら、とつとと済ませるんだぞ」

プラザは軍机の上に上半身を乗せると、プルンと引き締まった小尻を差し出し、自ら左右の手を回して、陰唇を開いてみせた。

本人は自覚していないだろうが、まさに調教済み女の痴態である。

最初の結合こそ強引であったが、その後のプラザは不満を漏らしながらも素直に身を差し出してきた。

真面目な女ほど、嵌まると抜け出せないということだろうか。

ベルンハルトは遠慮なく応じて、毎日、休みなくセックス漬けにしてやった。

「嫌がっていたわりには、もう濡れていますね。淫乱な身体だ」

剥き出しの陰唇を覗き込んで笑ったベルンハルトは、陰唇から肛門まで舐め上げた。

「くっ、わたしは別に。お前がやりたがるから仕方なく……あう、久しぶりだから、気持ちいいい♪」

ピチャピチャピチャピチャ……。

もはやベルンハルトにとつて舐め慣れた陰唇だ。どこをどう責めればプラザが喜ぶか手に取るようにわかる。

濃密に開発されたというのに、戦が始まってからはしばしの空白だ。気高い心とは裏腹に、肉体は欲求不満だったようで、水飴のような愛液が大量に溢れ出る。

「き、気持ちいい、気持ちいいの、ベルンハルトの舌でペロペロされると幸せ、もう何も考えられなくなっちゃうよ」

理性を失いつつある牝獣の淫核を掴んで引つ張ったベルンハルトは、膣孔に舌先を入れてかき混ぜてやる。

「ひいあゝ、それだめええ大きな声が出ちゃう！」

「なら、我慢しろ」

「ぐっ……」

軍机にうつ伏せになっているプラザは、右手の人差し指の第二関節を噛んで耐える。

口を開けない代わりに、膣孔の方は大きく開いていた。実に物欲しげだ。

そこに舌を突っ込んで、膣孔の内部を全部舐め回してやるようにしつつこくクンニをしていると、短気なプラザは切れた。

「はあはあはあ……や、やるなら、とつとつとやれ！」

「言い方が可愛くありませんね」

冷たく応じたベルンハルトは、腔洞に人差し指を一本入れて、クチュクチュと出入りさせた。

じつくりと焦らされた女騎士は、やがてプライドを捨てた甘えた声を出す。

「はあうん……ちんちんちようだい。もう我慢できないの。わたしだつてずっと我慢していたのだ。お前のちんちん欲しい。ベルンハルトのぶつといおちんちに蓋されたかったのお〜♪」

「はい。よくできました」

すっかり痴情に溺れた女上司の姿に気をよくしたベルンハルトは、立ち上がるといきり立つ逸物を取り出した。

そして、プラザの左足だけを持ち上げると、そのままぶち込む。

「はう……馴染む、ベルンハルトのおちんちんが凄い。これ入れられると、わたし、何も考えられなくなっちゃう♪」

軍机の上で横位になったプラザは、右足を地面に、左足を天高く掲げて、実に気持ちよさそうな顔で悶絶する。

グチュグチュグチュ……。

逸物でリズムカルに牝穴を穿り回しながら、ベルンハルトはその耳元で囁いた。

「プラザ様、今回の件、俺に任せてくれないか？」

「ぐっ、お前、わたしを小娘と侮って、はあん、おちんちんで操ろうとしているだろ」

「まさか。プラザ様のために汚れ仕事を引き受けたいと申しているのです」

不信任をあらわとするプラザだが、肉体的な快感に溺れながらでは、まともな追及はできない。

「まあいい、好きにしろ。それよりも、早く、お前の熱いザーメンをビュービュー注ぎ込んでくれ」

「ありがとうございます。それでは参ります」

すっかり痴情に狂っているプラザの懇願に誘われたベルンハルトは、今度こそ思いっきり腰を動かす。

「はあ、はあ、はあ、いい、いい、気持ちいい♪ わたしは、わたしは、これの奴隷。ベルンハルトのおちんちんの奴隷になっちゃう！ なっちゃうの！ イク、イク、イク、イク、来て、きて、きてええええ!!!」

すっかり逸物に馴染んでしまった元レズ女は、我を忘れて絶叫する。

瞳孔がキュンキュン縮まって、男に射精を促す。

「うおおお!!!」

、どくん、どくん、どくん……。



「う……」

一瞬、ためらったような表情をしたスズだが、根がM気質なのか、男の指示には逆らえなかった。

逸物を唾えたまま、恐る恐る下半身を時計回りに移動させてきた。

寝台に仰向けになったベルンハルトの顔の上に、スズの下半身が来る。

黄色生地にオレンジのフリルの付いたスカートを遠慮なく豪快にたくし上げた。

細くて白い脚。しかし、山歩きするだけあって、しっかりと筋肉はついていて形はいい。

その二本の足が交わるところに、淡い黄色地にオレンジのリボンの付いたお洒落でファンシーなショーツがあった。

「う……」

逸物を唾えたまま、スズは恥ずかしそうに身悶えるが、ベルンハルトは容赦なくお洒落な生地でラッピングされた乙女の小尻を掴む。

（ああ、まったく、こんなに濡らしてしまつて……）

ショーツの上からでもわかる。大きな染みができていた。

愛らしい清纯派そのものの顔をしていたとしても、身体は牝でしかない、ということだろう。

いやが上にも昂ったベルンハルトは、情け容赦なく乙女の最後の砦を引きずり下ろす。

「うぐっ」

白い剥きたてのゆで卵のようなお尻があらわとなり、ショーツの股布部分との間に透明な糸が引かれる。

ショーツを抜き取ってから、内腿を濡らしてしまっている乙女のツルツルの尻に両手をあてがい、尻朧を割って、小さな肛門を晒す。さらには陰毛さえ生えていないぷっくり土手高、まるでゆで卵でも隠していそうな恥丘の肉裂の左右に親指を当て、開く。

メラリ。

「うぐっ……」

乙女の濡れた花が咲いた。

ぷくんと濃厚な芳香が鼻につく。いわゆる処女臭というやつであろう。

処女膜がある以上、その裏側を洗うことはできず、処女の陰唇は、男性経験のある大人な女よりも必ず臭いがきついものだ。

それでも、性的なことに興味津々な少女であれば、己が陰唇の意味を知っているから、普段から丁寧<sup>い</sup>に洗っている。

しかし、性的なことに疎い少女や、嫌悪感を持つ少女は、自分で陰唇に触れることすら厭<sup>いと</sup>う傾向があり、奥まで丁寧に洗うはずがない。

結果、清純派な乙女ほど、陰唇からは強烈な牝臭を放っているものなのだ。

「ふぐ、ふぐ、ふぐ……」

逸物を啜えたままスズは、羞恥に身を固くしている。

とてもではないが、フェラチオを続ける余裕はなさそうだ。

小さな淫核は完全な包莖。膣孔も小さかった。指の一本も入らないのではないか、と思える狭い穴だ。

汚れを知らぬ生花を摘むことに、暗い情熱を刺激されたベルンハルトは、親指を押し入れて、膣孔を強引に開いてみた。

とろつと中に溜まっていた濃密な愛液が溢れ、次いで女の子の最深部が露呈される。

窓の外はあいにくの雨のため十分な光量があるとは言えなかったが、スケベな男の視線は舐めるように視姦する。

(結構、しっかりした処女膜があるみたいだな)

膜の面が大きい。真ん中に一本の線が入った状態で、穴が二つになっている。中隔処女膜と言われる形状だ。

「これがスズの秘めたる花か。凄く綺麗だよ」

「はう」

「スズの花の蜜を頂こう」

ベルンハルトはスズの腰を下げさせると、乙女の陰花に口づけをした。

口内に酸っぱい味が広がったが、気分としてはとても甘く感じた。  
ピチャピチャピチャピチャ……。  
花弁を愛でるように、舌を動かす。

「ほう、ほう、ほう……」

男の上に腹這いになったスズは、逸物を吐き出してしまった。もはや奉仕する余裕はないのだろう。

愛らしいお尻の穴までヒクヒクさせながら悶絶している。

「そ、そこは、らめええ、らめええ、変に、変になってしまふ。ひい、そこはらめえ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちよすぎておかしくなる。おかしくなっちゃうのおお♪」  
おそらく街でスズを知る人たちに、その印象を聞けば、誰もが真面目で健気、清純な乙女という感想が返ってくるであろう。

そんな愛らしい乙女が、我を忘れて悶絶しているのだ。男としてはいやが上にも昂る。  
ベルンハルトはスズがまだ知らぬであろう、未知の世界へと連れて行ってやろうと、舌先を高速回転させた。

膣孔を処女膜に至るまで舐め回し、淫核を口に含んで吸い上げる。

「もう、らめええええええ!!!」

プシャッ!

熱い愛液の塊が破裂したように膣孔から噴き出し、少女の会陰部が激しく上下する。スズが絶頂したということを察して、ベルンハルトはようやく口を離す。

「はう、はう、はう……」

男の上で潰れた蛙のようになってしまったスズの痴態を、ベルンハルトは楽しむ。

小さな女壺をヒクヒクと痙攣させながら、だらしなく大量の牝蜜を垂れ流している。

まさに入れ頃になってしまった乙女を前に、もはや、ベルンハルトは我慢できなかつた。大人の男としての余裕は投げ捨てて、牡の欲望に支配される。

「そろそろ、入れるぞ」

「はあい。よろしくお願いします」

クンニで絶頂しただけで、スズの腰は完全に抜けてしまったようだ。

もう少し休ませてやりたいとも思ったが、そこまで余裕を持った態度で接せられるほどに、ベルンハルトは紳士ではなかつた。

いきり立つ逸物の欲求のままに身を起すと、脱力している乙女を仰向けにして細い両足をM字に開く。

その上に覆いかぶさって、失禁しているのかと見紛う膣孔に、脈打つほどに興奮している逸物の切っ先を添える。

「くっ」

呻き声を聞いて、スズの顔を見ると、両手を握り締めた彼女は顔をひん曲げて奥歯を噛み締めている。

どうやら、壮絶な痛みがくると覚悟しているようだ。

(そんなにかまれたら、オマ○コが裂けちまうな……)

無駄な力が入りまくっているスズの姿に、いささか頭を冷やしたベルンハルトは、軽く溜息をついてから、声をかける。

「ゆっくりと深呼吸をしな」

「は、はい、すー……はう……、すう……はう……」

ベルンハルトの言いつけにはどこまでも素直にスズは、大きく深呼吸をした。薄い胸板が上下する。

そして、スズが息を吐ききる寸前に、ベルンハルトはことを起こした。

ブツン！

確かな手応えとともに、処女膜を打ち破った。

「ふぎっ！」

まるで仔猫が驚愕の悲鳴でも上げたかのような声とともに、慌てて膣孔に力を入れようとしたようだが、いまさら遅い。

乙女の最後の砦を突破した肉棒は、情け容赦なく隧道を押し広げて突き進んでいく。

（うわ、こいつはすげえ、単に締まるだけではなくて、ザラッザラだ）

ブラザやロータスといったやんごとなき姫君は、なんだかんだ言って温室の花だ。それに対してスズは野生の花である。

そのたくましが、腔洞の締めつけから伝わってくるかのようだ。

感動したベルンハルトは、己が欲望のままに押し込めるだけ押し込む。

「ふあ」

スズは実に可愛らしい悲鳴を上げる。

まだ、肉幹の方はかなり余裕があるが、どうやら亀頭部が、最深部にある子宮口を捉えたようだ。

しばし野の可憐な花を摘む感触を楽しんだベルンハルトだが、スズが落ち着いてきたところを察して、上体を起こすように促す。

「見えるかい。スズのおマ○コの中に、俺のおちんちんが突き刺さっている」

スズは後ろ手に腕を置きながら、興味深そうに男女の結合部を覗き込む。

「はい。す、凄い。お臍の裏まで騎士様の大きなものが入っている感じがします」

「ツーツと赤い血が溢れて、肉幹から白いシーツに滴る。」

「痛めてしまったようだ。ごめんな」

「いえ、大丈夫です。初めてのときはこういう風に血が出るって聞いていましたから。で

も、さすがは騎士様のおちんちんです。ぶつとくて、大きくて、オマ○コが凄い広がつちやつて、お腹がいっぱい。すつごく気持ちいいですう♪」

やたらと饒舌なのは、痛みを我慢しているからかもしれない。

全身から不自然なほどに汗が噴き出ているようだ。

「……そうか」

破瓜直後の少女に気を遣われている、と察したベルンハルトは、静かに頷いた。

しばし様子を見てみると、スズが恐る恐る口を開いた。

「あ、その……動いていいですよ。そして、中に出してください」

「今日は安全日とかそういうことか？」

魔法で避妊できる、といっても魔法は高価なものだ。一般市民には経済的に痛いであろう。

スズは首を横に振るつた。

「いえ、わたし、そういうのよくわからないんですけど、赤ちゃんできたら、ちゃんっと自分で育てますから、騎士様に迷惑はかけません」

その答えにはベルンハルトもいささか意表を突かれて、慌てる。

「こちら、それじゃ俺があまりにも甲斐性なすぎだろ」

「でも……わたし、子供欲しくて……」

明日をも知れぬ生活をしているがゆえの焦りというものなのだろうか。スズの願望に、ベルンハルトは軽く頭をかいてから応じた。

「スズ、俺のおちんちんが、キミのオマ○コの中に入っているな」

「はい……」

ベルンハルトが怒っていると思ったのが、スズは怯えたような顔で応じる。

実際にベルンハルトは、怒気を感じていたかもしれない。こんないい少女に刹那的な夢を持たざるを得ない現実には。

「ということももう、スズは俺の女なんだな」

「え、わたし騎士様の女？」

目をパチクリとさせるスズに対して、ベルンハルトは力強く宣言した。

「だから、お前のことは俺が守る。子供を一人で育てるとか悲しいことは言うな！」

「え……騎士様、嬉しい♪」

スズはパツと表情を輝かせると同時に膺洞をキュンキュンと締まらせてきた。

（うわ、こいつはまた、いきなりイキやがったな）

ここまで喜んでもらえると、ベルンハルトとしても嬉しい。

ベルンハルトは激情のままに、スズを押し倒すと、乙女の蠢動しゅんどうに耐えながら腰を動かす。

「あ、あん、ああ……」

歡喜に我を忘れたスズは、ベルンハルトの身体に両手両足を絡めて喘いだ。

（くっ、これが破瓜したばかりの女か、なんつーオマ○コしているんだ。しかし、いきなり射精したのでは、年上の男としていささか格好がつかないからな）

睾丸から噴き出した熱い猛りが、肉棒を駆け抜けていくが、男としての見栄を刺激されたベルンハルトは、丹田に力を込めて射精欲求に耐えながら腰を上下させる。そんな男のやせ我慢を、乙女の肉体は敏感に察してしまったようだ。

「はう、騎士様のおちんちん、わたしのお腹の中でビクンビクンしています。凄い、気持ちいい」

女の膣洞というのは、なかなか敏感で、男根のちよつとした変化を敏感に察することができるのだらう。

「俺も気持ちいい。スズのおマ○コは最高だ」

「あう、そんなに褒められると、はう、あう」

気持ちよさそうに喘いでいたスズの膣が再び固く締まった。

「どうした？」

「お、おしっこ、でそう……、こんなときに……」

元々破瓜の痛みに涙を浮かべていた顔が、一段と哀れに歪む。

その表情にベルンハルトは嗜虐心を刺激される。

「ふっ、漏らしてもいいぞ」

「だ、ダメですよ。そんな粗相をしたら、騎士様に嫌われてしまう」  
尿道を締めようとしたのか、キュッと膣孔が締まった。

（うお、これはまたうねるように締めてきやがった）

必死に射精を我慢していたベルンハルトは内心で呻く。

絞り取られそうな逸物を年上としての見栄で我慢して、ベルンハルトは優しく振る舞う。  
「その程度のこと嫌ったりしない。キミは思いつきり楽しめば、それでいいんだ」

「はう、騎士様……」

破瓜の痛みに耐え、尿意に耐える。顔を真っ赤にして涙を堪えた乙女の複雑な表情が否  
応なく、男の嗜虐心を煽る。

腰使いは一段と荒々しくなり、子宮口を打ちすえて、子宮を揺らしてやりながら、その  
振動が膀胱にまで響くように意識する。

「ふわ、ふわわわ……」

尿意を我慢しているとき、女は常以上の快感に支配されるのだという。

破瓜直後だというのに、我を忘れている少女の中にあつて、男もまた暴走する。

「そろそろ、いくぞ」

「はうううう」



スズは戸惑ったようにモジモジしながら応じる。

「え、わ、わたしはスズといます。花屋をしています。騎士様はお得意様で、あと、子供を産ませてくれるって約束を頂いています」

「子供を産むっ!？」

目を剥くプラザに、ベルンハルト悪びれずに応じる。

「まあ、内縁の妻といったところだな。名前は聞いたろ、仲良くしてやってくれ」

「っ!？」

目を剥いて硬直していたプラザは、握り締めた手をわなわなと震わせていたが、やがて限度を超えたらしい。

「この女つたらしのろくでなし！ お前なんか女に毒を盛られて死ぬのがお似合いだ！」  
罵声とともに拳を浴びせられながら、ベルンハルトは思い出した。

「そういえばロータスはどうした？」

「あちらも一命を取り留めて、地下牢にぶち込んである」

「……そうか」

体調を回復させたベルンハルトが地下牢に足を向けると、壁の手枷に両手を吊るされたロータスが、ぐったりと脱力して座っていた。

左足には鎖の付いた重りまで付いている。

おそらく激怒したプラザあたりが、折檻したのだろう。華美であったドレスは破れ、白い乳房が片方露出している。

しかし、そんな被虐的な姿になっても、ロータスは美しかった。

究極の美女というのは、いついかなるときでも隠し難いオーラを放つものらしい。

薄汚い地下牢で、腋の下を晒して脱力しているさまも、なんともいえない退廃美に満ち、色っぽかった。

足音に気付いたロータスは顔を上げて、軽く目を瞠る。そして、納得したように静かに頷いた。

「そう、わたくしの最後の賭けは失敗しましたのね」

「いや、オレアンダー王国は滅亡した。キミの復讐は終わった」

「……そうね」

ロータスは素直に頷いた。

一族の仇を討ち、やるべきことはすべてやった。という満足感に浸っているようだ。

しかし、生気は感じられない。もはや現世への望みも未練もないということだろう。

「それで新国王を暗殺しそこなったわたくしは処刑ね。一族何親等まで皆殺しかしら？  
いくらでも構わないわよ。そんな者わたくしにはいないもの」

彼女に忠誠を誓い、身の回りの世話をしていた近臣たちは、最後の暗殺劇を執行する前

になけなしの金を渡して逃がしたらしい。

ベルンハルトはロータスの細い顎を抓んで、顔を上げさせる。

「お前は俺に処女を差し出し、真のご主人様と呼んで、いろいろと便宜を図ってくれた俺の篡奪劇の功労者だ。これからはだれ憚ることなく俺の愛妾として生きてみるのはどうだ？」

ベルンハルトの言葉に、ロータスは信じられないと言いたげに首を横に振るう。

「わたくし、あなたの命を狙ったのよ」

「あんな場所で、毒殺なんて不可能だ、ということはお前もわかっていたんじゃないか？」

ロータスの黒い瞳を、ベルンハルトは至近距離から見つめる。

「お前の真のご主人様は俺なんだろう」

ロータスは力なく視線を逸らした。

「わたくし、もう徹底的に汚された女よ。いろいろな男の薄汚い指と舌と精液と視線、それらが触れてない場所は一つも残っていないの。おしっこを何度も漏らしたし、そ、その……排便している姿でさえ何度も見られた。そんな下劣な女、新国王の褥に侍るには相応しくないわ」

「調教済みの女も、それはそれでいいものだけ」

不意にベルンハルトの右手が、ロータスの短いスカートの中に入ると、陰阜をまさぐつ

た。

「はあっ！」

いきなり瞳孔に指を入れられたロータスは目を剥く。

「ベルンハルトは指を三本もぶち込んでグリグリと抉ってやる。」

「この身体の、このオマ○コの真の所有者は誰か思い出させてやるよ」

ロータスを無理やり立たせたベルンハルトは、重りの付いていない右足を抱え上げると、有無を言わず、逸物をぶち込んでやった。

「はあ、はああゝゝん」

「完全調教済みの女と自称するだけあって、もうトロットロである。」

「くっ、初めてのときからわかっていたことだがお前は名器だな。様々な男を知って練れたオマ○コは超絶な名器に成長したぜ。これを失うなんて国家の損失だな」

女は金を食わせるほどに色香が出て、犯し心地のいい身体に成長するという。

だからこそ、傾城の美女たちに、世のお大尽たちは大金をつぎ込んで楽しむのだ。

その理屈でいえば、この国でロータスほどに金を食わされた女はいないだろう。何せ、二代の国王が惚れぬき、贅沢の限りを尽くさせたのだ。

「ああ……酷い人、わたくしに、ご主人様の肉人形として生きろというの？ なんの望みもないままに、屈辱と嘲笑にまみれて」

「お前にはまだやるべきことがあるだろ」

鎖に繋がれたまま荒々しく犯されて、ロータスはキョトンとした顔をする。

その表情から、復讐を終えて、本当に満足し、抜けがらになっていたことを察したベルンハルトは笑った。

「子供を産め」

「えっ!？」

「お前は子供を産んで、リシユリユー家を再興させる。その義務が残っているんだよ」

ここに至って、ロータスの身体が一気に熱くなり、生気が戻ってきたようだ。

黒い瞳から大粒の涙が止め処なく溢れる。

「そ、そう。わたくしはリシユリユー家を再興させる。そのために生きる。ああ、ご主人様。わたくしの汚れた身体を、ご主人様のおちんぼ、ザーメンで浄化してくださいませえええ、そして、ご主人様の子供を産ませてください」

「よし、いい答えだ」

生き甲斐を見出したロータスは、艶やかに乱れる。

「ああ、子宮が、子宮が熱い。やっぱり、わたしの身体はご主人様のおちんぼでないと、真の快樂を得られない。気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいのお〜〜♪」

冷たい牢獄の中、子宮を燃やした女の嬌声が響き渡る。

心の傷が深ければ深いほどに、女の色香は熟成するものなのかもしれない。  
被虐の色香で男を虜にする。

「いくぞおおお!!!」

猛ったベルンハルトは、傷付き疲れ果てた美女を生き返らせるために、その子宮に向かって思いきりよく射精した。

※

「わずか一年で国王か。やればできるものだな」

オレアンダー王家を滅ぼしたベルンハルトは、新たなエレメンツ王家の初代国王として即位した。

感慨に耽るベルンハルトの身体に、三人の裸の美女美少女が取りついている。

「お前たち。これは、わたしの旦那なのだぞ。お情けで側室に入れてあげたんだから、少しは遠慮しろ」

プラザはベルンハルトの頭を、自らの乳房で抱き締めた。

「わたくしとご主人様は、そんな世間とは関係ない深い絆で結ばれているのです」

ロータスも負けじと、ベルンハルトの頭を、自らの乳房で抱き締める。

結果、ベルンハルトの顔は右半分をわがままおっぱい、左半分をけしからんおっぱいに包まれることになった。

「ああ言えばこう言う。お前とは一度、決着をつけなくてはいけないと思っていたのだ」  
「あら、同感ですわ。女としての魅力はわたくしの方が断然上だ、ということをお願い知らせて差し上げますわ」

プラザとロータス。昔から険悪な雰囲気撒き散らしていた二人であるが、同じ男とベツドに乗るといふ直接対決を迎えて、一段とヒートアップしているようである。

「だから、お前ら喧嘩するなつて」

ベルンハルトは、プラザとロータスの桃尻を撫で回す。大きさを言えば、ロータスの方が大きくむつちりとしているが、プラザの方が弾力に富んで引き締まっている。

「だってえ、お前のことを一番愛しているのはわたしだぞ」

「いいえ、わたくしの方が断然愛していますわ」

くだらないことで争う女たちに呆れ果てたベルンハルトは、言葉で何を言っても無駄だと悟り、彼女たちの尻の谷間から指を入れて、陰唇をまさぐつてやった。

「ああ、そこ……いいい」

「気持ちいいです。ご主人様」

指マンをされたプラザとロータスは陶然となるが、口唇から漏れる喘ぎ声も競っているかのようだ。

クチュクチュクチュクチュ……。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全巻の方向性でございませぬ。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!